

巻頭言

「肥満治療は医の原点」を支える本誌の役割

東邦大学医療センター佐倉病院内科学講座

白井 厚治

肥満がなぜ健康障害を起こすか。この20年間、脂肪細胞自身に研究の目が向けられ、脂肪細胞は単なる脂肪蓄積臓器でなく、その調節因子として多くの物質(アディポサイトカイン)を分泌していることが明らかになった。その研究推進の場として本誌が果たした役割は大きい。その結果、集積された多くの基礎実験成績から、脂肪細胞自身が肥大してくるとインスリン抵抗性物質を分泌、ブドウ糖の取り込みを拒絶、脂肪酸取り込みに必要なりポ蛋白リパーゼ発現を抑制し脂肪からの取り込み拒絶、さらに血流補給そのものを拒絶し、必死に、脂肪蓄積を防いでいることが判明した。脂肪細胞の肥大化による自己破壊を防いでいるのであろう。これを全身から見れば、2型糖尿病、高中性脂肪血症+低HDLコレステロール血症、高血圧と認識され、いわゆるメタボリックシンドロームを呈するわけである。この疾病概念の確立にリーダー的役割を果たした本学会の活動を思う時、一会員としても大変誇りに思われる。これまで、各分野の研究者は、個々最適を求めて、血糖低下、脂質改善、降圧の治療、開発一途に取り組んできた。確かに、各ガイドラインは「肥満」治療の重要性を指摘しているが、薬物治療が比較的效果もあり、簡便で誰でも取り組めることから、実際には薬物治療が重視されてきた面も否定できない。しかし、肥満が放置されたままのこれらへ個々治療精鋭化は、まさに両刃の剣であり、全体から見れば病態を悪くすることもありうる。

ここでもう一度、原点にもどる必要がある。肥満治療は、常にコンプライアンスの低さ、リバウンド問題がつきまとうが、それも含めて病気と考え、その分析と対処法の開発が、取り上げられるべき時を迎えたと思われる。それも、「吞気は無頓着」との決めつけや「精神科の問題」との丸投げをせずにである。高度肥満症は、特異的な代謝変動に加え、行動特性に独特なもの存在が指摘されはじめた。その把握は決して容易でないが、陥りやすい医療者側の独善を排するためにも、客観的評価系の確立が望まれる。これまで、この分野も、海外研究者の意見に頼る面もあったが、必ずしも最適とは思われない。そろそろ、我々の手で現代社会の日本人に当てはめられるものを開発する必要がある。精神科、心療内科分野の協力を得、患者目線にたった生活習慣の実態把握と是正プログラムの作成が期待される。

本誌は、肥満症を中心に、基礎・臨床、生化学・人文科学の領域に区別をつけず、斬新な考えの提示と、議論が活発にできるテーブルとしての役割を果たしてきたが、今後ますますその使命の重要性は高まってゆく。